慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サルトルにおける「言語」の問題 : Scripta manent
Sub Title	"Scripta manent", la question du langage chez Sartre
Author	白井, 浩司(Shirai, Koji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サルトルにおける「言語」の問題

——Scripta manent——

白井浩司

周知の如くサルトルは、慶応義塾大学と、日本における訳書の刊行者・人文書院との招きによって、昭和四十一年九月十八日に来日し、同年十月十六日に帰国した。約四週間の滞日中に三回の講演を行ったが、『知識人のための弁護』という総題を附せられたその講演は、内容といい、精緻な論理を展開する重厚な態度といい、ひろく各方面に大きな反響を呼んだ。講演の論旨は新聞、週刊誌、雑誌などがすでに報じているので、ここで改めて紹介する必要はないと思う。ただ注意しておきたいのは、サルトルが弁護し、あるいは呼びかけているのは、高度な技術を持った専門家に対してであって、まだ十分な知識を所有するに至らない青少年にむかって、闇雲に急進的な政治参加を説いているのではないということだ。この点から、講演の持つ悲痛な調子に搏たれたことを私は告白しておきたい。サルトルは、人類の連帯性の必要を痛感し、平和を唱え、ベトナム戦争に反対する。だが、その反対運動の拠りどころとしてコミュニストに全幅の信頼を置いているのか、というと、必しもそうとは断定できかねる節がある。周囲を見廻しても楽観的気分に誘うものはなにもない。一九五〇年ごろから、彼は思いきってコミュニストに接近した。彼に悪罵を浴びせることをやめなかったコミュニスト作家ルイ・アラゴンとも手を握った。だが、彼と肝胆相照したのは、昨年死んだトリアッチとその指導下にあったイタリア共産党で、フ

ランス共産党が全面的に彼をうけいれているとはいえないのである。しかも、トリアッチを失ったいま、イタリア共産党が彼に対する従来の態度を変えないとは断言できない。ソ連の作家同盟は彼に同情的だが、サルトル自身の口ぶりから察すると、彼らとサルトルとの間にはある種の越えられぬ溝があるようだ。サルトルを迎えたソ連の知識人が、サルトルの芝居『ネクラソフ』を、十九世紀ロシアの詩人ネクラソフの伝記と誤解していた話や、そのほか日常茶飯の奇妙な振舞いをサルトルはひきあいにだして、ソ連の知識人の無教養にやや失望していたが、私にはサルトルの気持がよくわかった。彼は世界のコミュニストにそれほど期待をかけているのではないと思う。しかし、彼らのほかに期待をかける者がいないと判断して、〈自分に逆らって〉、彼らを信じようとしているのではないだろうか。その苦渋がこの三回の講演からにじみでていたように私は思う。

しかしながら、作家以外の高度の専門家が〈知識人〉になることは安部公房がいうようにあまり難しいことではない。医者は患者を治療し、医学を研究する合間に（もちろんその合間があると仮定しての話なのだが）、反戦の演説をぶつことはできるが、作家の場合はそうはいかないのである。なぜなら文学は、反戦演説をぶつことを含めての全人的表現であり、しかも前提として密度の高い作品を産んでいなければ彼を文学者と呼ぶわけにはいかないからである。ここに当然、作家のアンガージュマン、つまり第三回目の講演がなされた理由がある。

サルトルを交えた討論会『文学は何ができるか』（一九六四・十二月）のなかでサルトルは、原子爆弾の恐怖を伝えるために、文学作品が原子爆弾そのものについて直接に語る必要はない、たいせつなのは、語られている人間が、この世界内に投入されていて、彼としては行わざるをえない、数々の意味の把握という作業を自由に実行できることだ、といっている。そして最後にこうつけ加える。「もしも人がこのような自由の瞬間を生きたならば、いいかえれば、一瞬の間、彼が、書物を通して、疎外や圧制の力からまぬがれえたとすれば、彼はそのことを忘れないだろう。文学にはこれができる、あるいは少くとも、ある種の文学にはこれができると私は信じている」と。将来、よしんば暇ができたとしても娯楽だけを目的とした作品を書こうとは思わないとサルトルはいっていたが、それだからといって、アンガージュマンを表にふりかざした作品を書くことが必要だともいってはいない。そしてここでは、戦後に発表され

た『文学とはなにか』で主張された理論が、かなり大幅に訂正され、表明されているといった印象をうけた。それでは訂正されたものはなにか、そしてまた、訂正されないで残っているものはなにか、それを検討するのがこの小論の目的である。

「……われわれが語りうるあらゆる企ては、歴史を作るというただ一つの企てに帰着する。いまやわれわれは、人間の手によってプラークシス（実践）の文学を開始するために、ヘクシス（所有）の文学を放棄しなければならぬ時にまで導かれた。――歴史のなかの、また歴史に働きかける行動としてのプラークシス、すなわち、プラークシスがあらわにしてくれるところの、敵意と友情にみち、怖ろしくもあり、愚弄的でもあるこの世界をもってする歴史的相対性と道徳的・形而上学的絶対との綜合としてのプラークシス、これこそわれわれの主題である」と、サルトルはかなり威勢よく、『文学とはなにか』のなかに書いていた。当時のサルトルは、コミュニストとは、明確な一線を劃していたので、「われわれはまだ自由なのであるから、フランス共産党の番犬に加わろうとはしないだろう」といい、さらにつぎのようにいい添えてもいる。「コミュニストはときおり、われわれの書物が、プロレタリアートに対しても、資本主義に対しても自己決定を行なわないプチ・ブルのためらいを反映している、と主張する。それは誤りで、われわれの立場ははっきりしている。これに対して、われわれの選択は効果がなく抽象的であり、革命的政党への加盟が伴わないならば、インテリの遊戯だと彼らは答える。私はそのことを否定はしないが、フランス共産党がもはや革命的政党でないのは、われわれのせいではない。……たとい市民としてわれわれが、厳密に限定された環境においてフランス共産党の政策をわれわれの投票によって支持できるとしても、それはわれわれのペンをそれに服従させねばならぬ、ということを意味しない」と。これはかなり強い言葉である。現在のサルトルは、共産党に対してもっと柔軟な態度をとっていると思うが、それでも、この言葉から非常に遠い地点に立っているとはいい難いし、特に文学作品を宣伝の道具に使わぬという点に関しては一貫しているといってよい。コミュニスト作家と根本的には異なる要求を文学に対して持っている彼が、左翼作家同志の奇怪な仲間ぼめに加わらないのも当然であって、一部では大傑作とされているアラゴンの『レ・コミ

ュニスト』を認めず、また、問題はややずれるが、これも日本の一部から神格化されているロマン・ローランについてその作品を問題にもしていなかった。作家の志向が進歩的であるからといって、そのまま彼の作品を認めるというようなふやけた態度は、サルトルのとらないものである。ということは、作品の評価を、作家の進歩的思想を基準にしては下さないという意味であろう。それならば、いかなる評価の基準を彼が持っているのかを考えてみなければならない。

『文学とはなにか』で論述される彼の最も重要な主張、文学作品の他律性とはつぎのようなものだ。

――創造は読書のなかでしか完成しない。芸術家は自分のはじめた仕事を完成する配慮を他人に任せなければならないし、読書の意識を通じてしか、自分を作品に本質的なものと考えることができない。したがって、あらゆる文学作品は呼びかけである。書くとは、言語を手段として私が企てた発見を客観的な存在にしてくれるように読者に呼びかけることである――

あるいはまた、

――芸術作品は目的を持たぬという点でわれわれはカントに賛成する。しかしそれは芸術作品が目的であるからだ。カントの命題は、あらゆる画面、あらゆる彫像、あらゆる書物の奥底にひびいている呼びかけを考慮していない。カントは、作品がまず事実として存在し、しかるのち見られると信じた。ところが、作品は人がそれを見るときにだけ存在するのであり、なによりもまず純粋な呼びかけ、純粋な存在の要求なのである――

「一九四七年における作家の状況」と題される章が示すように、『文学とはなにか』は一九四七年に発表された。これがいつごろ書きはじめられたかは確定できないにしても、書きだしの部分から判断して、「現代」誌が創刊され、彼が実存主義を唱えたあとであることはたしかであり、したがって一九四五年以降ということになるだろう。戦争が彼を閉じこめていた狭い枠から彼を外部に押しだし、個人主義を放棄させ、他者との意見疎通を志向させるに至ったのだと、彼自身も公言し、またたしかにそのことは証明できると思うのだが、それと同時に文学作品の他律性が、同じように戦争の影響下に彼のなかで育っていった、と簡単に考えることはできないのである。なぜなら、一九四四年の三月、同人雑誌に載った「往きと復り」という論文のなかに、文学の他律性の基礎となるべき言語の

他律性がすでに唱えられていたからである。一九四四年三月といえば、まだフランスは独軍の占領下にあった。そしてこの論文には、戦争はその影さえ落していない。日附を知らなければ、この論文が平時に書かれたといわれても誰も疑問をさしはさまなかったであろう。サルトルはここでブリス・パランの『言語の機能と本性に関する研究』をとりあげ、この書物をかなり手きびしく政撃している。私の小論にとって、ブリス・パランその人は関係がないので、ここではサルトルの言語についての考えのみを追うことにする。結論の一つとしていえることは、この論文で〈言語〉といっている箇所を〈文学〉という語に置き直せば、それはそのまま『文学とはなにか』での論旨になろう。

――〈他者〉がいる。私のしゃべり言葉を、勝手気ままに理解し、あるいは理解することを拒否する〈他者〉がいる。……一つの発端の問題がある。つまり、誰が最初か、ということだ。〈他者〉か、言語か。言語であれば、〈他者〉は姿を消す。もし〈他者〉が、名づけられてはじめて姿を現わすべきものなら、〈他者〉を作るのは言葉になる、ちょうど言語が、〈地虫〉や〈あられ〉を作るように。また言葉は、〈他者〉を除きうることになってしまう。かくて独我論から逃がれられなくなる。つまり、私の感覚の流れから、〈他者〉という言葉がある種の集合体を切りとり、これをある種の一般的な意味で飾り立てることになるのだ。……そうなれば、私はたったひとりで語ることになる。いわゆる〈他者〉の介入なるものは、私の言語に対する私の言語の反応にすぎなくなる。ところがこれと反対に、私は自分が語りはじめるや否や、言葉が私をすりぬけ、かなたで、私の外で、思いもかけぬ様相をとり、予想外の意味を帯びるという胸のしめつけられるような確信を抱く。それは、言語の構造自体のゆえに、私の自由ではない一つの自由によって理解されることが言語の宿命であるからではないだろうか。一言でいえば、言語を作るのは〈他者〉ではなかろうか。〈他者〉こそはじめにあるのではなかろうか。(傍点白井)――

さて、フンボルトが『言語と人間』のなかで鮮かに指摘しているように、言語は、それ自体で完成されたもの、すなわち〈エルゴン〉ではなく、なにかを生みだす活動態、すなわち〈エネルゲイア〉である。言語は〈事物〉ではなく、〈行為〉なのである。人間の言語が単なる記号ではなくて、シンボルであることは、現代の言語学によってひろく認められているところであろう。簡単な例でいえ

ば、〈赤〉とは、三原色の一つの色彩であるとともに、コミュニスト、あるいは赤ブドウ酒のシンボルである。つまり言語はシンボルであるが、シンボルの故にこそ伝達の問題が必然的に生じる。言語がシンボルとなるのは伝達が予想されるからであり、また、伝達が可能であればこそ言語がシンボルとなりうるのだ。あの森のなかの一本の樹、それはその樹特有の形態と色彩と場所と時間とを持って具体的に存在する。しかしそれにもかかわらずわれわれは〈キ〉という一般的な言語によってそれを表現する、あるいは表現せざるをえないのだ。すると聞き手はそれを連合心理によって把握し、話し手のいう特定の樹を了解するに至る。しかも言語は、時枝誠記氏が『国語学原論』のなかで述べているように、対象をそのまま、写真が対象を写しだすようにシンボル化するのではなく、「素材に対する言語主体の把握の仕方を表現し、それによって聞き手に素材を喚起させようとするもの」なのだ。意味作用という作業、すなわち対象にむかっての主体の志向性がこの段階において考えられねばならなくなる。

以上のような現代の言語学の概念によっても、言語は事物ではなく行為であること、伝達という要素をそれ自体において持つこと、などが理解される。サルトルにおける言語観が、この現代の言語学を反映すると同時にさらにそこに、いわゆる実存主義に根ざした彼独自の言語観が注入されていることは疑う余地がない。ここでもう一度、「往きと復り」の文章にもどろう。

サルトルは、言語がさきにあるのか、それとも〈他者〉がさきにあるのか、と問う。〈他者〉がさきにあるのは当然だが、この〈他者〉とは神ではない。もしも神であるとすれば、たったひとりの、素裸で、なにも語らぬ、沈黙に陥っている完成された人間がいて、それからあと、この人間が話しはじめるといった光景が想像できるのだが、この場合、なぜその人間が話すことを思いついたのか、どうしてその必要が生じたのか、奇異であるという以外ない。だが、われわれの人間社会においては、つぎのようになっているのではあるまいか。すなわち、私は、本来〈他者〉によって、また、〈他者〉に対してしか存在しないのであり、私が姿をあらわすと、たちまち私は〈他者〉の眼ざしのもとに投げだされ、〈他者〉は私にとって私自身と同じように確実に存在する故に、私こそ言語なのである。なぜなら言語とは、他者の面前におけるエグジスタンスにほかならないからだ。

『出口なし』のなかでサルトルが語っているあの他者の眼ざし、それは私の意見とは無関係に私を規定し、私について勝手気ままな

判断を下す。私は、物もいわぬ他者の眼ざしにむかって、闘いの姿勢をとらざるをえない。サルトルは書いている。

――私は彼方で、傍若無人な男、脳味噌の足りぬ奴になり、いっそう物笑いの種になる。言語のいっさいがここにある。すなわちそれは、この無言の絶望的な対話なのだ。言語とは対他存在だ。……〈他者〉が私を理解しないとすれば、それは語るのが私だからか、あるいは彼が他人であるからか。また、言語が私を裏切るとすれば、それは言語に固有の邪悪さのせいなのか、むしろ言語が私と〈他者〉との間の単なる接触面のごときものだからではあるまいか。要するに、言語の問題が起こりうるためには、〈他者〉がまず与えられていなければならないのだ。(傍点白井)――

つまりこれで、サルトルにおける言語の問題が、単なる言語の領域を越え、〈他者〉に関する存在論の分野において検討されなければならない意味が了解される。

したがって、『存在と無』の第三部「対他存在」の第三章「他者との具体的な諸関係」のなかに、言語についての言及を見出すことは少しも不思議でない。

私と他者との関係は相剋である、とこの章のなかで定義したあとでサルトルは、愛とはなにかをとりあげ、ついで言語の問題に移ってゆく。というのは、愛情の表現には言語が前提条件になると考える人がいるからだが、これについてサルトルは、「往きと復り」のなかで展開している議論を、いわばより哲学的に表現しているといえよう。彼はつぎのようにいう。

――言語は、〈対他存在〉にあとから附加される一つの現象ではない。言語は根源的に〈対他存在〉である。いいかえれば、言語は、一つの主観性が他人にとって対象として体験されるという事実である。単なる諸対象の世界においては……言語は、根源的に、他の一つの主観とのなんらかの関係を前提とする。……私がなにをなすにせよ、自由に考察され実行された私の諸行為、私の諸可能性へ向っての私のもろもろの投企は、外部に、私から脱れでる一つの意味を、しかも私が経験する一つの意味を持っているのであるが、ただそれだけの事実からして、私は言語である。その意味においてのみ――ハイデッガーが「私は、私のいうところのものである」と言明しているのは正しい。――

さらにまた、さきの方でつぎのようにもいう。

――私のいろいろな態度や表現や言葉は、他人に対して、その他の、もろもろの態度や表現や言葉をしか、指示することができない。それ故、言語は、依然として、他者にとっては、一つの魔術的な対象の単なる特性であり――魔術的な対象そのものである。言語は、距離をおいた一つの行動であり、その効果は、他者が正確にこれを知っている。それ故、言葉は、私がそれを用いるときには、聖なるものであり、他人がそれを聞くときには、魔術的なものである。したがって、私は、他者にとっての私の身体がなんであるかを知らないと同様、（他者にとっての）私の言語がなんであるかを知らない。私は、私が語っているのを聞くことはできないし、私がほほえんでいるのを見ることはできない。言語の問題は、まさに、身体の問題と平行しており、身体の場合に妥当した記述は、言語の場合にもあてはまる。――

『存在と無』が上梓されたのは一九四三年であって、第二次大戦の最中であった。つまり、まず『存在と無』が書かれて、存在論の枠内で言語の問題がとりあげられ、ついで「往きと復り」によって、言語論が表面に持ちだされた。つぎにこの言語論を背景に『文学とはなにか』のなかで文学論が展開された、という段取りになる。

さて、この言語論は、『文学とはなにか』のなかでより具体的な形をとる。すなわち、散文における言語と、韻文における言語との相違に関する考察である。サルトルは、詩が散文と同じようなやり方で言葉を使用しない、あるいはむしろ、まったく言葉を使用せず言葉に奉仕するものだという。詩人とは、言語を利用することを拒絶する人間である。彼らは世界を名づけようとは思わない。なぜかというと、名づけるとは、名づけられる対象のために、その名称を永久に犠牲とすることを意味するからである。これをヘーゲル風にいえば、事物が本質的なものであるとすると、名称は非本質的なものとなる。

詩人とは、道具である言葉と一挙に手を切って詩的態度をえらんだ者のことだ。詩的態度とは、言葉を記号としてでなく、事物として考える態度のことである。なぜなら記号には多義性があるからだ。すなわち、一方においては、記号をガラスのように意のままに横切り（これはヴァレリーがすでにいっていたことでもあるのだが）、それを通して意味されたものを追求できるし、他方においては、そ

の視線を、記号が指示する現実にむけ、記号を事物（objet）と見なすこともできるからである。

――語る人間は言葉の向う側、事物（objet）の傍にいるが、詩人は、言葉のこちら側にいる。語る人間にとって言葉は飼い馴らされているが、詩人にとっては、言葉は野性のままである。前者にとって言葉は、有用な契約であり、それは次第に使い古されて、役に立たなくなれば棄てられる道具だ。後者にとって言葉は、草木のように地上におのづと成長する自然のものである。――

散文家と詩人との言語に対する立場がこのようにはっきりと区別され、したがって、言語にはこれを使用する文学者のあり方によって二種類のものがあることが理解される。それならばサルトルが、『存在と無』以後に強調する、言語は根源的に〈対他存在〉であるという表現は、散文家の用いる言語に対してのみ適用されるとはいえないだろうか。サルトルが、文学の他律性を主張するのは、すべての言語についてではなく、散文家の用いる言語についてであることは、『文学とはなにか』によって明確になるであろう。詩人の用いる言語が事物であり、小宇宙であるという彼の見解は、マラルメやヴァレリーなどの象徴派の詩語に対する見解と同調的であるように思われ、私はそのことを前に述べたことがあるが、今回のサルトルの来日を機に、サルトル自身にたずねてみた。するとサルトルは私がいった、詩語は柱時計の振子に、散文は歩行に比較できるというヴァレリーの「詩について」には影響はうけなかったが、『ウーパリノス』に若干の影響をうけたといっていた。だが私には、『ウーパリノス』とサルトルの主張との類比を見出しえなかった。私の読み方が浅かったのかもしれず、この点に関してはなお将来、検討を加えるつもりでいる。もともと作家における影響というものは微妙きわまりなく、事は内面の問題に関連するので、似たような表現に出会ったからといってすぐに影響を云々することは性急のそしりを免がれ難い。とはいえ、La liberté, la liberté, toujours recommencée がヴァレリーの La mer, la mer, toujours recommencée をもおもったものであることが、サルトル自身の言明によってあきらかになったように、また、言葉というものは汲みつくせないというヴァレリーの名言をしばしば引用しているように、マラルメやヴァレリーの言語観の反映がまったくない、というのも事実に反するのではあるまいか。『文学とはなにか』では、詩の問題はほとんど放棄されている。それは詩では、いわゆるアンガージュマンが不可能であるからなのだ。しかし、それならば、ヴァレリーとはまさに正反対に、詩というジャンルが散文よりも低いもの、あるいは余計なもの

として斥けられているか、というとそうでもない。その点において割りきれないものが残るのであり。このアポリアはまだ十分に解決されていないのではあるまいか。なぜなら、彼のアンガージュマンの文学理論が、『文学は何ができるか』における発言をはじめとする最近の文学観が示すように、やや変質したといえなくはないからだ。そしてこの変質を促したのが、『文学とはなにか』のなかに矛盾したまま共存していた彼の言語観にあったのではなかろうか。いいかえると、散文における言語は、たしかに道具としての要素を持つにしても、現代の言語学が認めているように単なる記号ではなく、シンボルなのであって、必しも使い古されたら捨てられるものばかりではないと思う。

この問題に他の一面から光りをあてるのが、『聖ジュネ』である。泥棒、男色者、私生児で、しかも詩や自伝的な観念小説や芝居を書くジャン・ジュネに託して、現代の諸問題を縦横に論じ、批評文学の一高峯を示したと思われるこの書物は、言語の区分、つまり、詩語と散文との区別が、機械的に、あるいは外面的になされるのではなく、むしろ作家の内面とのつながりにおいて把握されねばならないことを証明しているのではないかと思う。

さてジュネは少年のころ、他人から泥棒だと指ささされ、そのために自ら進んで泥棒になろうとする。すると、意思疎通のために用いられる言語が、逆に、意思疎通の断絶のために用いられるという結果が生じる。一つの例を挙げれば彼が万引のために本屋に入っていった場合がそれだ。彼は稀観本を注文し、売子が注文の品物を探しに行っている間、彼は別の珍本を鞄のなかにいれてしまう。彼は売子に声をかけたが、それは贋の意思疎通だった。シュールレアリストの画家たちが、彼らの絵画によって従来の絵画を否定したように、一般の言語を用いて言語そのものを破壊する作業がここに生まれる。売子は高価な書物を求めて店の奥に入って行った。だがそれは、ジュネを勝手に振舞わせるためにジュネの許から遠ざかる結果になった。純粋に仮象の世界がここでは実在となり、実在の世界が否定されてしまう。言語が逆に使用される、というのは、結合すべきときに分離し、開示すべきときに包み隠し、調和をもたらすべきときに不調和を招来させるからである。

もちろん彼が、年がら年中盗みを働いているわけではない。ブルジョワ社会の一員としてブルジョワたちに迎えいれられるようにな

った彼は、彼らと普通に言葉をかわす。また彼にしても、衣服や食糧を買うことがあるのだが、買うのは盗んだ金による場合が多かった。この金は、いわば贋の金、彼自身が所有しているのではない金なのだ。この場合、すべてが瞞着であり喜劇であって、言語だけが真実なのである。彼が嘘をつくために言葉を用い、泥棒を行っても、あるいは、「その靴がほしい」と贋のブルジョワ然としていったにしても、言葉は彼にとって、相も変わらず他郷のものであり、したがって彼は、ブルジョワから言葉を借りるか、盗むよりほかに仕様がない。つまり言葉（**veerbe**）とは〈他者〉なのだ。

もちろん、ブルジョワ的言語に対抗してつくられた隠語というものがある。これによってジュネは、社会の外にいる人たちとの間に意思疎通が可能ではないかと考えられようが、隠語とはもともと〈詩的な言語〉なのだ。隠語が、高貴であるとも魅惑的であるともいうのではないが、隠語は、対象をその側面的、第二義的な特質をあらわす語で表現する（たとえば赤ん坊を、**chiard** 泣虫と呼ぶように）という意味において詩的なのである。なぜなら、泣虫といわれようと、結局この隠語は、赤ん坊を指すからである。つまり、〈不在の実在物〉に意識が送りかえされ、話者の間にはそれについての暗黙の了解が成立するからである。サルトルはこれについて意味深い考察を添加する。

――われわれは思いがけぬ分野で、マラルメの暗喩的な言葉を発見する。それは半ば声を持たず、半ば多弁で、直線をいくつもの斜線でおきかえる言語であり、それを通して、とらえ難く、よく知られず、つねに羞恥に似た一種の粗大性に覆われている現実が推測される。そこでは比喩は唯物的ではあるが、一から十までいわぬことを誇りとしている。……あらゆる説明を抹殺したために、それらの表現は詩的なものとなる。――

しかしジュネは、受身の同性愛者であるため、社会外の社会においても硬派から爪はじきされ、しかも受身の同性愛者同志の社会は成立しない。すでにブルジョワ社会から除け者になっているジュネは、かくて孤立無縁の者となるのだ。彼はまだ詩人ではないが、散文で自己を表現することはできない。なぜなら彼は、普通の言語と、隠語と、受身の同性愛者の用語とを知っているが、贋ブルジョワで、贋の硬派で、贋の女であるジュネには、この三つの言語のどれか一つを使用することもできないからである。言語は、人間界と自

然界の間を漂うように、命名作用の外側でひとりで存在しはじめる。言語は、仕種になり、仮象になってしまう。あともう一歩で、彼は詩人になりうるのだ。ジュネは、自分の欲する者に身を変えるために命名権を行使する。彼は、「おれは王さまだ」とか、「ピエロだ」とかいって自ら命名した者その人になる。彼自身が書いているではないか。「めまいを起こさせるような一つの言葉」、泥棒という言葉が彼を泥棒にした、と。言語が仕種だとすると、仕種もすでに言語であるといえる。なぜなら、仕種は、仮象をあらわすためになされ意味を示すために用いられるからだ。

私たちは、言語を先祖からうけついだ財産として所有しているのだが、ジュネは言語から疎外されているので、言語を外側から見ることになる。言語が彼に水劫の烙印を押したために、言語のなかに泥棒の存在性が隠されているのだ。ジュネにとっては、未開人にとってと同じく、名前とは名づけられた対象物の存在性をなすのである。言語は、孤立無縁な彼にとって、現実では決してえられぬ、もろもろの財産の身がわりをつとめ、それらの言語の持つ意味は、事物にむかって逃れ去るかわりに、言語の上に霊魂のように巣喰う。ジュネはサルトルに、花は大きらいだと打明けたそうだ。つまり、彼が愛するのは薔薇そのものではなく、その名前なのである。言語は、ジュネにとって意思疎通の役には立たず、符牒の体系でもなければ、世間に向っての談話でもない。それは、ジュネをその内部に蔵した一つの世界なのだ。

くりかえしていうと、ジュネの詩的言語とは、押込み夜盗行為にひとしく、それは言葉を盗み、言葉を悪しき目的に無理に奉仕させることである。人為的で贋物で、現実的な基盤を持たないジュネの詩的言語は、現実の対象物を指示するために用いられるのではなく世界の仮象を構成するために利用される。この意味において、ジュネは、ボードレールやマラルメの系統につらなる。シュールレアリストは、ランボオやロートレアモンの後継者であり、彼らにとって詩は、彼らの啓示作用の道具となる。ところがジュネにとっては、詩はなにものをも啓示しない。言葉が燃えあがり灰となって崩れ落ちるとき、残るものは無のみである。

かくてジュネは、詩人としてよみがえる。ここで詩人と散文家とを区別しなければならない。散文家とは、自己の主体的自由を読者に認められることを求める、まさにその度合いに応じて、読者の主体的自由を認める者のことだ。いいかえると、散文は、このような

認識の相互関係の上に成立するが、一方、詩人は、自己が認めていない大衆によって認められることを求める。散文家は読者に語りかけ、読者を説得し、ある程度の心情の一致をそこにつくりだす。詩人の方は、読者を媒介として、自己自身にむかって独語する。散文家と読者との間では、言語はそれが伝達した思想のためにゼロに帰する。詩の場合、たとえばマラルメの場合には、読者も作者も同時にゼロとなり、最後に言葉（Verbe）のみが残るようにお互いに消しあう。

サルトルのいう散文と韻文との区別が、『聖ジュネ』のなかでも生きているといえようが、ただサルトルは、散文における言語が、作家の思想を伝達したあとゼロになる、という文章に左のような注をつけているのだ。「これは制限つきでしか正しくはない。すべての言語は、ある程度は詩的である」と。この注はどういう意味だろうか。少くともサルトルが、ジュネの散文『花のノートルダム』、『泥棒日記』などを考慮にいれていたことは確実だろう。いいかえると、これらの散文が、サルトルのいままでの散文観では簡単にわりきれないということでもあろう。「すべての言語は、ある程度は詩的である」というのは、やや飛躍していえば、散文における言語は道具である、という『文学とはなにか』における主張の部分的否定につながるものだとも考えられよう。

『聖ジュネ』のなかには、ジュネとマラルメとの親近性がしばしば語られている。たとえば、ジュネは言葉の力によって、自己の賤民としての生涯を、「根源的なる冒険」に変えるが、この「根源的なる冒険」と、マラルメの「孤独なる劇」とが同一の主題を持っている、というのである。この主題とは、世界の流転によって人間は虐げられ悩まされるが、しかしそれには、失墜が勝利のしるしになり変わる、という終局におけるどんでん返しが伴っている、ということなのだ。サルトルがいまやマラルメをアンガージュマンの作家と呼ぶのはそのためであり、これは『文学とはなにか』の時代にはとうてい想像もつかなかったことなのである。

『聖ジュネ』は〈言語〉の問題に関しても多くの示唆を含んでいるが、その他の面でも興味ある考えが述べられている。〈言語〉とは直接の関係はないが、つぎのような文章は、サルトルについての誤解をとくために役立つのではないだろうか。誤解とは、彼が歴史に殉じ、歴史以外に価値を認めない、といったマルキシズム的評価のことだ。サルトルは書いている。

「……私は超歴史的真理の存在を信じている……。超歴史的真理といっても、少しも崇高なものではない。だがたとえば、私が、

〈デカルトは『方法敍説』を書いた〉というとすれば、ここにはあらゆる時代を通じて真実なものが存在する。この真理は、永遠のものではない。なぜならその内容は歴史的であり、日附の定まったものであるからだ。しかしそれは超歴史性のものである。なぜならそれは人類の、経済、社会、宗教の進化にはいささかも依存してはいないから。それは百年後にも今日におけると同様に真実であろう。」

これはしかし、〈言語〉に対する彼の態度が硬直していないことを暗々裡に示している文章であるともいえないだろうか。

サルトルの〈言語〉に対するさらに進展した考察は、一九六五年九月号の「美学雑誌」に載った、対談「作家とその言語」のなかに展開されている。これは座談であるから、果してどの程度までその発言を信用してよいか疑問であるとしても、漸くサルトルの言語論が形をなしてきた証拠ではないだろうか。ともかくもサルトルは、弁証法的思考を十分に駆使して〈言語〉について語るのだが『聖ジュネ』との関連でいうと、「すべての言語は、ある程度は詩的である」という注記が別の形で述べられていると考えてもよいと思う。

サルトルはまず、自己の幼年時代の体験に照らして、言葉と事物とは混同されるものだという。子どもにとってテーブルという言葉はテーブルそのものなのだ。書くために書く、言葉の全体を創造する、とよくいわれるが、それは子どもたちが砂でお城をつくるようなものだ。書くことが意思疎通を目的とする、という点がここでは無視されている。フローベールは、ひとりだちできる言葉のお城をつくろう、と考えたし、そのことを書いてもいるが、これは言語の幼年時代のある時期が彼のなかに残存しているからだろう。

右に述べた考えはサルトルの持論で格別新鮮なものはないが、つぎに彼が指摘することは、新しい彼の立場を伝えており、きわめて重要な発言だと思う。誤りを避けるため、全文を引用する。

「(ひとりだちできる言葉のお城をつくること)これは作家としての最初の踏みだしだと思う。ある時期に、このことを夢想しなかったならば作家になることはできないだろうと思う。しかし、この時期が乗りこえられねば、たとい十五歳でも、ほんとうに物を書くことはできない。」(傍点白井)

サルトルは、言語の幼年時代が乗りこえられるべきことを強調はするが、言葉への古き信仰の残滓が完全に拭いされるとはいっていない。特にサルトルほ、彼が散文を書くとき、この残滓が表面にでるというのである。なぜなら、「散文家は、単に命名する人間にとどまることはできない。散文家はある種のいい方で命名する人間だからである。」この文章もまた、『文学とはなにか』時代の一本調子から彼がはるかに遠ざかっていることを示すのではあるまいか。哲学においては、純粋な意思疎通が問題となる。ここにも困難はあるし、サルトル自身は『存在と無』のなかに、「人間とは空しき受難である」と記したことを、この原理に反するといって反省しているのだが、散文の方は、純粋な意思疎通だけでは片づかないはずである。この点にサルトルが注目を払ったのは、一つの進展ではあるまいか。

そしてこの進展をサルトルは、一つの矛盾があらわれた、と解釈する。この矛盾とは、文筆家（écrivant）と、作家（écrivain）との区分から生じる。「テル・ケル」誌による若い評論家、作家たちは、事物を示し、説明する者を〈文筆家〉と呼び、いわばフローベールの後継者的な、表現方法に工夫を凝らす者を〈作家〉と呼んでいる。サルトルの立場は、この二つを止揚することにあるようだ。彼はつぎのようにいう。「文筆家たらずして作家たりえず、作家たらずして文筆家たりえない」と。サルトルは、彼が目的とするのは、文筆家の方へ送りかえすなにものかであるというが、それでもつぎのように述べるのである。すなわち、意思疎通するためにだけ言葉を用いても、あきらかに例の残滓、砂のお城、または言葉のお城の残滓がある、ということだ。私たちはある記号（言葉）を用いて、その場にはないものを指し示す。しかしこの記号は、対象の肉と呼ばれるものをそのまま表現するわけではないので、「この言語の性質そのものによって、意思疎通不可能な残滓、意思疎通不可能の余白、これは一定したものではないが、避けることのできない余白が残る、とつねに結論を下さなければならない。」文筆家と作家との矛盾、言語にふくまれている二つの対立する要素、すなわち伝達可能な部分と、不可能な部分との矛盾、この矛盾をサルトルは、自己の仕事の素材とするというのである。

彼は最後に、〈言語〉は彼にとって、目的である以上に手段である、といっているが、それにすぐつけ加えて、〈言語〉を目的として扱う瞬間、画家がパレットから絵具をえらぶように、言葉をえらぶあの中間的瞬間は楽しい、と語っている。ここにも柔軟なサルトル

を見ることができるのではあるまいか。

日本における第三回の講演は、「作家のアンガージュマン」と題されていた。ここではもちろんアンガージュマン（自己束縛であり参加を意味する）の必然と必要とが説かれているが、『文学とはなにか』での硬直した姿勢はほとんどない。結論の部分が十分に私たちを納得させるといえないことは事実であるが、文学作品の目的と、その形式に関してのサルトルの見解は彼の新しい態度に裏づけられているように思う。彼によると、文学作品の目的とは、世界内存在であるわれわれ人間の二面性、すなわちわれわれの裡にある普遍的なものと特殊性とのあいまいさ、及びその矛盾を探求することにある。また、作品が、世界内存在の体験的意味として意思的に与えられるとすれば、作品がどんな形で現われようともその形式は重要でない。こうしてサルトルは、カフカも、ジードも、アラゴン（ただし、最近の小説『処刑』に限って）も、プルーストも、ビュトールも、彼の考える文学の目的に合致した小説を書いたことを認めている。『文学とはなにか』のなかの、最初に引用した文章などと比べると、ここにかなりの懸隔が生じたことに気づかざるをえないが、それは彼が、文学についても、そしていうまでもなく言語についても、一つの結論に満足して、それ以後、思索を停止してしまうというような怠惰な精神の持主ではないことを証明しているといえるだろう。そして、言語に対する彼の考察の深化が、文学に対する態度の微妙な変化をもたらしたことも、ほぼ確実であると思う。（66. 11. 1）

後記――時日に迫られたので出典についての注をすべて割愛した。ローラン・バルト、ロブグリエ、ビュトールなどのサルトルに対する批判について触れる余裕もなくなった。言語学者の諸説も参照したが私の知識が不十分なので、サルトルの主張とうまく嚙みあわせるまでに至っていない。穴だらけの論文であることを深く自省している。